

2006 年日韓教授統一思想研究会
「現代文化と統一思想」

靈界論

鮮文大学日本語日本学科教授

ユ・ジェゴン (柳 在坤)

千葉県浦安市：一心特別研修院
共催：統一思想研究院/PARP 後援：世界平和教授アカデミー
2006 年 8 月 26 日—27 日

霊界論

鮮文大学日本語日本学科教授
ユ・ジェゴン

1. はじめに
2. 霊界の实在に関する原理的根拠
 - (1) 無形実体世界と有形実体世界
 - (2) 被造世界における人間の位置
 - (3) 肉身と霊人体との相対的關係
3. み言葉から見た霊界
4. 李相軒先生の霊界メッセージと霊界論
 - (1) 霊界で見た生と地上生活の報告書
 - (2) 統一原理セミナーと決議文採択と宣布式
5. 清平の霊的大役事（省略）
6. 既存の霊界論
 - (1) 臨死体験
 - (2) スウェーデンボルグの霊界論
 - (3) 丹波哲郎の霊界論
 - (4) 「幸福の科学」の霊界論
 - (5) モンロー研究所の霊界論
7. 結語

1. はじめに

多くの人々は死に対する疑問と不安と恐怖から脱することができず、死後の世界に対しても確信を持つことができないのが実状である。

死は「存在が終わることか」、それとも「また他の何かの始まりであるのか」、「死後に来世はあるか」、もしあるとしたら「その世界はどんな世界か」と言う疑問を巡って今まで多くの論争が続いて来た。

各宗教の聖職者たちが唯物思想の影響を受けて多くの人々に死の実体や死後の生の存続などに対する正しい霊的知識を教えてくれなかったからである。言い換えれば、唯物論が生んだ古典的な世界観、人生観、宗教観によって多くの人々が社会的な名誉や物質的な富を最重要視する風潮が続いて来たのである。

また学者の間にもそのような現象の研究に対しては、科学ではないと言う理由で深く介入するなどと言う考えが蔓延して来た。

世の中には科学的に存在が証明されたこと以外は信じない人々がいる。霊魂や死後の世界の存在など証明されていないことはすべて嘘だ、幻覚だと言って受け入れない人々である。

しかし科学と言うのはまだあまりにも初期的な発展段階にあって、分からないことが多い。

科学は元来、物質的存在のみを扱っている。私たちの意識など非物質はその範疇に入らない。本来、物質や非物質という側面で把握しなければならないことを物質だけに限定して世界を把握して来たのが今の科学である。

科学は実験、観測、検証を通して理論体系を構築したが、その範疇に入らない現象に対しては目をつぶっている。世の中には科学の範疇に入らない現象がたくさんある。それにもかかわらず、科学ですべて説明することができるという迷信が蔓延している。

科学はさまざまなことを明らかにして来たが、一番重要な死や霊魂や死後の世界の存在などに対しては何も解明して来なかった。

2. 霊界の実在に関する原理的根拠

霊界の実在に関する原理的根拠は、『原理講論』第1章「創造原理」の第6節「人間を中心にした無形実体世界と有形実体世界」にある。

(1) 無形実体世界と有形実体世界

被造世界は神の二性性相に似た人間を本にして創造されたために、すべての存在は心と体からなる人間の基本形に似ていないものは一つもない。それ故、被造世界には人間の体のような有形実体世界だけではなく、その主体としての人間の心のような無形実体世界も存在する。これを無形実体世界と言うのは、私たちの生理的五官ではそれを感じることができず、霊的五感でのみ感じることができるためである。霊的体験によれば、この無形世界は霊的な五感によって有形世界と共に実感することができる実体世界であるので、この有形無形の二つの実体世界を合わせて宇宙と呼ぶ。

無形世界は主体の世界であり、有形世界は対象の世界として、後者は前者の影のようなものである。有形世界で生活した人間が肉身を脱げばその霊人体はすぐ無形世界へ行って永住するようになる。

(2) 被造世界における人間の位置

第一に、神は人間を被造世界の主管者として創造した。

人間を創造するにおいて有形世界を感じてそれを主管するようにするためにそれと同じような要素である水と土と空気で肉身を創造し、無形世界を感じてそれを主管するようにするためにそれと同じような霊的要素で霊人体を創造した。

第二に、神は人間を被造世界の媒介体かつ和動の中心体として創造した。

人間の肉身と霊人体が授受作用によって合性一体化することによって、神の実体対象になる時、有形無形の二つの世界もその人間を中心として授受作用をなして合性一体化することによって神の対象世界になる。そのようにして人間は二つの世界の媒介体かつ和動の中心体になる。

第三に、神は人間を宇宙の総合実体相として創造した。

霊人体の性相と形状の実体的な展開として無形世界を創造したために、霊人体は無形世界を総合した実体相である。

イエス様は霊人体と肉身を持った完成したアダムとして来られた方であった。従って彼は宇宙を総合した実体相であったのである。

(3) 肉身と霊人体との相対的關係

1) 肉身の構造とその機能

肉身は肉心(主体)と肉体(対象)の二性性相になっている。肉身の善行と悪事に従って霊人体も善化または悪化する。

2) 霊人体の構成とその機能

霊人体は人間の肉身の主体として創造され、靈感でのみ感得され、神と直接通じることができ、また天使や無形世界を主管することができる無形実体としての実存体である。霊人体はその肉身と同一なる姿になっており、肉身を脱いだ後には無形世界(霊界)に行って永遠に生存する。人間が永存することを念願するのはそれ自体の中にこのように永存性を持った霊人体があるためである。

① 霊人体は生心(主体)と霊体(対象)の二性性相になっている。

生心とは神が臨在する霊人体の中心部分を言う。霊人体は神から来る生素(陽性)と肉身から来る生力要素(陰性)の二つの要素が授受作用をする中で成長する。そして霊人体は肉身から生力要素を受け一方でその肉身に返す要素もあり、これを生霊要素と言う。

② 霊人体は肉身を土台にしてのみ成長する。

生心が要求するものが何を教えてくれるのが真理である。

③ 霊人体はあくまでも地上の肉身生活でのみ完成することができる。

霊人体は肉身を土台にして生心を中心として創造原理による秩序的3期間を通して成長して完成するようになる。蘇生期の霊人体を霊形体、長成期の霊人体を生命体、完成期の霊人体を生霊体と言う。

神を中心として霊人体と肉身が完全な授受作用をして合性一体化することにより四位基台を完成すれば、その霊人体は生霊体になるのであるが、このような霊人体は無形世界のすべての事実をそのまま感じることができるようになる。

霊人体のすべての感性も肉身生活の中で肉身との相対的な関係によって育成されることなので、人間は地上で完成して神の愛を完全に体恤してのみその霊人体も肉身を脱いだ後に神の愛を完全に体恤することができるようになる。

④ 霊人体の善化も肉身生活における贖罪によってのみなされる。

⑤ 天国であれ地獄であれ、霊人体が行く場所は神が決めるのではなく霊人体自身が決めるのである。

霊人体は肉身を土台にしてのみ成長することができるように創造されたために、霊人体の繁殖はどこまでも肉身生活による肉身の繁殖と共になされる。

3. み言葉から見た霊界

2001年(天一国元年)1月13日は「神様王権即位式」の日であった。人類の真の父母としての印を捺されて出発したレバレント・ムーンが、表現することが

できない受難と茨の蕩滅復帰路程を遂に勝利し、完成した土台の上で奉献して差し上げた人類最大最高の慶事であった。数万年間歎息と恨に綴られた歴史を父母の心情で摂理して来られた神に遂に解放と釈放の日を奉献して差し上げた日であった。

3年後の2004年5月5日、双合十勝日を宣布され、この地に新天新地を創建することができるようになる後天開闢の時代を開いてくださった。これはまさにこの地球を天の前に還元させるための歴史的大革命の出発であった。

2006年6月13日、「宇宙平和の王真の父母天正宮入宮戴冠式」を清平にある天正宮で挙行された。宇宙平和の王が栄光ある即位をなさるこの行事を歴史上空前絶後の驚天動地の摂理歴史的な大事件だと言われ、参加者一人一人の頭の上には数千万の善なる祝福家庭の先祖たちが臨み、共にこの荘厳な瞬間を慶祝し、天地万物も喜んで共に叫ぶハレルヤの賛美が全天宙に響いていると言われた。

文鮮明総裁が2006年4月10日に第3回蒙古斑点同族連合大会の際にされたスピーチ、「宇宙平和統一王国創建の真の主人」を見れば、「人間には体の上には心があり、心の上には霊人体があり、その霊人体が入って行って生きようになる霊界の上には神様がいらっしゃるって、人間は真の愛を通して神様と完全に一つになる時に完全な人になる。」として、無形世界である霊界が実存することを認めて、「神様が創造してくださった人間の永遠なる故郷である。」と言われた。神が永遠不変なる方であるように、神が創造された霊界も永遠不変なのである。

神は人間に対して有形世界である現象世界の縮小体として肉身を創造し、無形世界の代表かつ主人として立てるために霊人体を創造した。従って人間は地上界で百年程生きた後、自動的に無形世界である霊界に入っていくようになっているのである。

人間には現象世界かつ有限世界である地上界の生において、肉身を土台にして霊人体を完成させなければならない責任がある。必ず真の愛の実践を通して霊人体が結実するのである。人間は肉身を用いて生きる地上界の生において完熟な生、すなわちこの地で天国を成して楽しみながら生きてこそ自動的に天上天国に入城するようになるのである。

霊人体は体と心の円滑な授受作用によって展開される肉身の生を土台にした真の愛の生を通してこそ成長し、完熟し、完成する。

人間としての義務と責任は肉身の誘惑を敢然に振り払って、善人になり、良心の道に従って人生の勝利を達成しなければならない。神の創造によれば、永遠の先生たる良心の命令に絶対服従して生きることにより、人間の永生が絶対に保証されるのである。

天国については、「神様の真の愛が充満し、真の愛が軸になって立てられた世界、真の愛がすべての環境圏の外形と同時に内容でもある世界、生の始めと終りに真の愛が一貫している世界、誰も真の愛によって生まれ、真の愛の中に生き、真の愛の懷に抱かれ、真の愛の軌道に従って次の世界たる霊界に移る生を生きる人々の世界である。」と言われた。

天国はまた、「お互いに慈しみ、為に与え、為に受ける自然な世界、一人が良くできることは全体を代表して良くできることであり、一人が好むことは全

体のために好むのであり、一人が喜ぶことは全体が共に喜ぶ。そのような姿の世界である。」とも言われる。

さらに、神も真の愛のために存在する天国は、「真の愛の空気に満ちている世界、真の愛を呼吸しながら生きる世界、いつでもどこでも生命が躍動する世界、構成員すべてが真の神様の血統に連結されている世界、全世界が身体の細胞のように不可分の関係に結ばれている所であり、神様の本質的な愛である真の愛だけが支配する世界である。」とも言われる。

この世と霊界は一つの世界として連結している。人間は肉身生活をしながらこの地上にいるが、永遠なる世界、すなわち霊界に向かっている。霊界へ行くようになれば、霊界の国があり、その霊界の主人は神である。

成約のみ言葉である『天聖經』によれば、霊界は墮落しないアダム主義、神を中心としたアダム主義であると同時に、真の父母を中心としたヒエラルキー（階層）組織であり、神が暮す故郷の地ですべてのものが愛で充満し、愛で満たされた調和の世界である、と言う。

霊界では、いかに人類を愛し、神が愛を中心としてつくられた被造物に対する時、どのように神のように愛するかが測定基準であり、コンピューター以上である。また神の愛をどのくらい受けた人なのかということが誇りあり、本来の真の愛が高い級数の愛であり、これによって級数が決定されるのである。

文先生は霊界の秘密を誰よりも良く知っておられる方であり、霊界が分からなかったらこの道に行くことはできなかったであろう、と言われた。言わば霊界の専門家なのである。

4. 李相軒先生の霊界メッセージと霊界論

イ・サンホン先生は1914年9月5日に儒教の家庭に生まれ、ヨンヘ専門大学(現延世大学校)卒業後、医師として勤務されていたが、1956年に統一教会に入教された後、36家庭として祝福を受け、真の父母様の思想である「統一思想」と「勝共理論」などを体系化された。

イ・サンホン先生は学術セミナーや教授セミナーでいかなる質問でも統一原理や統一思想のみ言葉を持ってすべて回答することができたが、質問がつかえる部分は霊界に関することだ、と言われた。それでいつかは必ず霊界論を執筆するつもりだと言っておられたそうである。

『天聖教』によれば、今や時が来たので、イ・サンホン先生が霊界に行かれたとのことである。霊界の事実を全部地上に知らせるために、摂理の御旨の中で行かれたと見るのである。霊界全体を分かろうとすれば、神様の指示を受けることができなければならないし、接ぎ木をしてやらなければならないというのである。これを全部体系化することができなければならないのであるが、今まで霊界がそのようにする基準に到達することができなかったというのである。

そのため、多くの宗教が出て、霊界の事実を紹介したとしても、それは一部分に過ぎず、その宗教の内容を中心として教えたことであり、全体を把握することはできなかったというのである。しかし今や成約時代を迎えたために、神

の許しを得て、霊界全体の様相を地上に説明することができる時代になったと
言うのである。

イ・サンホン先生は知性人たちに霊界の生に関する研究をしなければならない
として、

「知性人たちに自分の専攻分野も重要だが、霊界の生も研究しなければならない
と伝えてください。こちら霊界では、自分の専攻分野や自分の積んだ知性
が最高だと誇って神様の前に出ることはできないのですから。」と言って、た
くさん泣かれたと言う。

イ・サンホン先生がイ・ヨンスン女史を通して送ってきた霊界メッセージは大
きく二つに分けることができる。すなわち (1) 霊界で見た生と地上生活の報告
書、(2) 統一原理セミナーと決議文採択と宣布式である。

(1) 霊界で見た生と地上生活の報告書

先ず、統一思想はお父様が私たちに下さった根源的な思想であると言い、「私
は地上から霊界へ来たが、真のご父母様の思想を接木すること以外に関心がな
い。それは真のご父母様の思想よりもっと次元の高い思想はないことを悟った
からである。」と言われた。

神様については、「神様は見えません。ここのこの国でも神様は見えません。
しかしあの太陽の光よりもっと明るいこのきらめき輝いて美しい光、恍惚な光
は人間の頭脳、知性、理性では表現する方法がない。」と言われた。

イ・サンホン先生は、「今後、この膨大な霊界の姿を論理的に体系的に整理し
て、この夫人(金榮順女史)に伝えます。私がこれに全理想、知りたかった無形
世界を教授社会に綿密に知らせます。」と言い、「霊界は目に見える現象世界
とまったく同じようですが、霊界の膨大な規模は地上とは比較になりません。
と言われた。言い換えれば、私たちが執着している世界は何もない瞬間の世界
であることを肝に銘じなさい、というのであった。

天国とは、思いと行動がすぐ一つになる所であり、宝石よりもっと明るい光
体がいつも周囲にあるので、その明るい光体のためにお互いの難しさを分別す
ることができず、お互いが心を読み取るようになり、すべて分かるようになる
所である。また、天国はいつも心が和平するしかない所で、難しいこともなく、
不平なこともなく、お腹がすくこともない所である。天国は正に明るくて、愛
の至聖所である。愛しかないし、神の創造目的の根本をすべて成して行く所
である。

これに反して 地獄は、神の根本理論を全く理解することができない所で、
愛に背いた所、愛というものは文句が芽も開けない所である。お腹がすいて、
疲れてだるく、嫉み、妬み、不平なことがあまりにも多い所であり、いつも疲
れてだるいから、争いしかすることがない。皆不便だから、いつも不幸な姿を
している。

イ・サンホン先生は地上生活の大切さを強調された。

まず真の父母様の地上生活は多くの子たちに福を下さる期間である。地上生

活は人間が霊界へ来る前に、自己の生をどのように生きて来たのかという生活それ自体がこちらの霊界に記録されて行く過程である。霊界人は地上生活に基づいて自己の生の位置が決定される。

次に、霊界人は肉体的な制約がないために、自己の活動範囲が無限である。自己の本能が思うと直ちに相手に伝わるので、特別な言語表現が必要ないのに反して、地上人は限定された空間の中で限定された時間の制約を受けながら生きている。

また霊界人は霊界の世界で制約する妨害物がないので、無限に自由である。儀式主義問題のために神経を使う事がないから、無限に明るくて謙遜である。地上での善なる生活、悪なる生活の基準に従って、霊界で自己が行かなければならない永遠な場所が決定される。

この国には自ら解決する罪の蕩滅方法はない。霊界の法に一度引っかかれば容易に解くことはできず、こちらの永遠の国へ来てまた苦勞するようになる。そのために、この先生は永遠の生のために瞬間の苦勞を避けてはならない、と頼んでいる。いつも永遠な世界に焦点を合わせて生活するとか、地上の生を整理しながら生きる生が賢明な人間であるのである。

イ・サンホン先生が終りに下さった言葉は、「霊界の法は地上のように割り引かれることは全くない。そうであれば、この法度に引っかからない基準は天上の生ではなく、地上の生である。いつも霊界の生を準備する心で... 私が行かなければならない霊界はどこになるのかと言う心で生きなければならない。もしこの法度から離脱すれば、私の靈魂が行かなければならないのは天道に従ってそのままわなにかかるしかない。だから地上の生をよく行かなければならない。」と言うのであった。

統一霊界圏については統一霊界圏という名前ができたことは霊界に統一家族村が形成されているからと言う。

私たち統一食口たちが集まっている所は一般人たちが集まっている霊界圏とは異なる。しかし悲しいことに、統一霊界圏にも留まることができない食口が多い。

真のご父母様が「霊界の実相を隅隅まで明らかにせよ。」というみ言葉の究極的な意味は、皆さんを生かすためであるから、地上で罪を清算して来るように願う。長くない地上生活に未練を置かず、永遠なる世界のために生きるように願う。

皆さんはこのような霊界の実相を詳細に聞いて、地上生活で罪をきれいに清算し、こちらの下流層には絶対に来ないようにお願いします。真のご父母様の教えに絶対従順、絶対服従の信仰を持って、自分が知ると知るまいと犯した罪を地上できれいに蕩滅して来てください。地上では罪の蕩滅方法、すなわち解決策があるが、天上では蕩滅する方法がないと強調された。

統一霊界圏の上流層、中流層そして下流層の姿は図表（省略）のようである。

(2) 統一原理セミナーと決議文採択と宣布式

国連本部を始め、世界各地、すなわち地上で世界平和の確固たる基盤をつくった土台の上に、文先生は2001年10月14日、霊界のすべての壁を撤廃して、特に宗教圏を統一することができる霊界解放式を宣布された。

その後、イエス様を始めとした四大聖人たちとソクラテス、アウグスチヌスなど聖賢たちが参加する中で、「神様は人類の父母」というテーマで霊界セミナー（報告書では2001年2月12日－4月11日）が始まった。そしてキリスト教、仏教、儒教、イスラム教など4大宗教及び神はいないと否定した共産主義の指導者各120人の統一原理セミナー（報告書では2001年8月27日－2002年5月9日）を開催した。

又、世界的言論人12人とアメリカの言論人の代表40人の統一原理セミナー（2002年5月14日－2003年10月12日）が開催された。

さらに、摂理国 7ヶ国、すなわちアメリカの政治家（アメリカの歴代大統領36人、2002年6月8日－2003年8月1日）、韓国の政治家（高麗の歴代国王11人、朝鮮の歴代国王27人、大韓民国の大統領2人、2003年10月27日－2004年1月26日）、日本の政治家（天皇及び太子2人、政治指導者40人、2004年2月2日－2004年5月7日）、イギリスの政治家（政治指導者の代表12人、2004年6月18日－2005年6月22日）、ドイツの政治家（政治指導者の代表12人、2005年7月6日－2005年10月15日）、フランスの政治家（政治指導者の代表12人、2005年11月12日－2006年2月15日）、イタリアの政治家（政治指導者の代表12人、2006年3月22日－2006年4月）などに対する統一原理セミナーが開催された。

ここに見える120、40、12数などは神の摂理を勝利に導いて進むのにとっても重要な数字である。

統一原理セミナーに参加した四大聖人と宗教人、共産主義者、言論人、政治家たちは決議文採択と宣布式を行った。その内容は大きく分けて次のように五つに分けることができる。

- 第一、神様は人類の父母であり、全人類は兄弟姉妹である。
- 第二、文鮮明先生は人類の救世主、メシア、再臨主、真の父母、平和の王である。
- 第三、統一原理は人類救援のための平和のメッセージであり、成約時代の福音書である。
- 第四、宇宙平和統一は真の愛を中心として、超宗教、超国家、超人種の「為に生きる生活」を通して完成する。
- 第五、霊界（永遠なる天上世界）は実存する。

「国連に送る神様のメッセージ」（2004年8月1日0時）で、神は自ら「人類の父母」であり、人類はお互いに愛さなければならない、と教えてくださった。また、国連の覚醒を訴えられた。人類平和は武力で解決することはできないから、「人類に特別に私の愛する息子、文鮮明先生、真の父母を人類のメシアとして送ったから、その方を信じて、その思想で団結しなさい。」と強調された。

「イ・サンホン先生が真の父母に差し上げる書」（2005.6.22）では、イ・サンホン先生は、「まだ報告できない国家の指導者たちは霊界メッセージ、原理講論、

み言葉集などを毎日訓読して、ご父母様の業績などを見聞きしています。しかしまだご父母様が願われる神様の王国建設の基準にはあまりにも及ぶことができません。」として、常に申し訳ないことを禁じえなく、「今後、ご父母様が願われる基準に相応して、神様の王国建設に総力を傾けながら邁進します。」と誓われた。

5. 清平の霊的大役事（省略）

天総官フンジンニムと大母様の大役事によって、先祖解怨式と先祖祝福式が挙行され、霊界にはすでに3,000億人の絶対善霊たちが生まれた。

6. 既存の霊界論

(1) 臨死体験

臨死体験とは事故や病気で死に行く人がかろうじて生き返って意識を回復した時の不可解なイメージ体験である。

1) 脳内現象説：すべてのものが物質的に説明することができるとする一元論
臨死体験とは、生の最終的段階で衰弱した脳の中で起きる特異な幻覚に過ぎない。

近代的な科学的世界観によれば、人間の意識というものは脳の中で起きている神経細胞の電氣的活動あるいは化学的活動に還元することができる。

臨死体験というものも死の直前まで仕事に追われた人の脳で起きている神経細胞の特異な活動の所産であり、それ以上のものではない。

エンドルフィンという脳内麻薬物質が臨死体験での幸福感や恍惚感を説明してくれるのではないか、と言う学説もある。

脳に関する研究を進めさえすれば、人間存在の謎や人間の意識世界の謎をすべて解決することができるものと考えていたが、それは不可能だとする敗北宣言をするようになった。

2) 現実体験説：物質界とは別に精神界があるとする二元論

死後の世界を垣間見た体験であるとして、臨死体験は靈魂の存在と死後の存続を証明するものである。

研究の結果、アメリカ合衆国全体で800万人の成人に臨死体験があった。（ジョージ・ギャロップ）

死んだ人が蘇生した120人の中で、48%が臨死体験をしていた。（ケネス・リング）

その結果、臨死体験は万人に普遍的に起き得る現象である。

(2) スウェーデンボルグの霊界論

神のみ言葉によれば、スウェーデンボルグは自分の知性より神の聖霊を非常に大事に考えていた人であった。

スウェーデンボルグは真のお父様について、「空の日と月の光を総合したような光を発する方である。」とし、「人間の頭脳ではすべてを判断しにくい師である。」と言った。

イ・サンホン先生は、スウェーデンボルグが「かなり体系的で組織的な知性を持って対話する方であった。神様の愛も体験し、神様も認める方であった。神様を近くで見ることのできる良い位置にいる方であり、真のお父様の手を待つ方であった。かなり長い期間を神様と霊通しながら生きてきたので、霊界に来ても霊眼が明るく輝く方であった。」ということであった。

スウェーデンボルグはスウェーデン人である。自然科学、数学、物理学、哲学、心理学など20の学問分野で多くの業績を残した天才であると同時に、巨大な霊的能力の持ち主としても有名な方である。1747年、すべての科学研究の活動を放棄した後、半生の30年間は心霊的な生活と霊界の研究に取り組んだ。「私は霊界を探求して、それをこの世の人々に知らせることだけが価値があるのである。」と考えた。

- 1) 霊は永遠な存在であり、この世の自然界とは別に霊界というもう一つの世界が存在する。
- 2) 霊界には、霊の性格の多様さによって無数のグループがある。霊たちは皆自分に一番あったグループに属して永遠な生を送る。
- 3) 人間が死んでその霊が最初に行く所が精霊界である。
- 4) 永遠な生を送る霊界では、霊は自分を欺かないで本来の性格に帰らなければ、ずっと生きて行くことができない。
- 5) 霊界の太陽は霊の生命と秩序の基礎である。
- 6) 霊界の太陽から流れ来る霊流が榮譽の生命の源泉だ。
- 7) 霊界では霊的な人格の高低とか真の理性の高低とか言うことだけが霊の人格(霊格)を決める基準である。
- 8) 人間界は霊界のために将来の霊を産出するための繁殖の場である。
- 9) 霊界は時間を超越した世界である。
- 10) 霊界は全宇宙より広い広大無辺である。
- 11) 霊界で霊たちに真正な生命と理性、幸福を与える根源は霊界の太陽しかない。
- 12) 人間の時の生涯がそのまま死後、その人が永遠な生を送らなければならない世界をほとんど決定する。
- 13) 霊界の結婚は霊の子孫の繁殖を目的にするのではなく、男女二つの霊の霊的結合により、お互いの霊的幸福と霊的理性や知恵の増殖を目的とする。
- 14) 霊界とこの世は一つの金貨の表裏である。
- 15) <天の理>(神)というのは、この世もあの世も包含した全世界を作っている。

る創造原理であり、根本原理である。〈天の理〉は生命、理性、愛情、悟りなどのすべての善を産出する根本原理であり、調和の原理である。霊界の霊たちの生命や理性の源泉になっている。

- 16) 霊界は人体のように、全体として統一された形態になっている。
- 17) 天国は一人の霊の幸福は万人の霊の幸福、万人の霊の幸福は一人の霊の幸福であるという世界である。生命、悟り、調和の世界である。連帯の世界である。
- 18) 天国は 〈天の理〉を悟って、そこに無垢な信頼を傾けている者の国に過ぎない。
- 19) 霊の生活の目的は霊的人格の完成にある。
- 20) 霊界は霊的人格の完成を目的にする遂行の場である。
- 21) 霊界は秩序を持って運営されている世界である。
- 22) 地獄の霊は地獄が自分にあっているために、自ら自由に地獄を選択してそこに行く。
- 23) 地獄は各自の利己的欲望の世界であるために、調和はあり得ず、分裂の世界になっている。

(3) 丹波哲郎の霊界論

丹波哲郎は俳優、映画監督、霊界研究者として、いろいろな方面で活躍している。死後の世界を描いた映画「大霊界」を自ら製作して、300万名の観客を動員した。

生命は永遠であり、死後の世界は確実に存在する。霊人こそ人間本来の姿である。

霊界では愛が主役だ。霊界の愛は永遠である。

あの世では神が中心であるようだ。

自己のすぐ周辺に霊界が存在する。

霊界研究は今や人類全体の第一の義務であり、最高の課題になった。

1) 死後の世界を確信する理由

臨死体験者が証言する死後の世界。

『死者の本』が立証するこの驚くべき共通性。

2) 霊界の実相を知るようになれば、死はもう恐ろしくない。

霊界の実存を立証した科学的研究。

あなたが永遠に生きる霊界の実相。

霊界は多重構造による実存である。

3) あなたが死ねばどうなるか。

善霊になるか、悪霊になるか。

死んだ後に慌てないための心得。

4) 死後の運命はこの世での生と無関係ではない。

死の意識こそ霊魂不滅の証拠である。

今より幸福に生きるために。

(4) 「幸福の科学」の霊界論

「幸福の科学」は大川隆法総裁の言う地球的仏法真理を中心として来た人類を救済するために設立された宗教である。

仏教的な実相観によれば、「死後の世界が実相の世界であり、この世は一時的な世界」である。

霊界は似た人が集まっている世界だ。

霊界では破壊されることが何回あっても、本来の形態に再現される。そういう意味で終りのない永遠な世界、その思いが継続して存在して行く世界である。

天上界は天を自由に移動するのが可能な世界である。これに反して、地獄界は下に行けば行くほど暗黒がますます濃くなり、非常に重い感じになっている。

死後の世界に関することはまだ学問的に確立していない。

どのような生を生きれば、天国に行き、地獄に行くのか。この問題について明確に教えてくれるところが現在ほとんどない。

私はたくさん霊視している。

〈間違った点〉

1) 男女の愛あるいは夫婦の愛は法律的にも保護されている排他的愛であり、他人の介入を許さない愛である。愛の中には独占欲のようなものがあり、この独占欲は他人の介入を排除するという排他性を帯びている。

2) 仏法真理のために生きる人間は永遠な生命を持っている。

3) 真正な永遠の愛、真正な不変の愛は仏様の心の体現者としての愛である。仏様は与える世界でひたすら愛として最大の「存在の愛」で輝いている。仏様は人類の父であり、母でもある。人類の親である。

3) 仏様が作った世界。すなわち三次元以後四次元、五次元、六次元、七次元八次元の世界は、時間を内包した空間とその中を動く光だと言うことができる。「光」「空間」「時間」- この三つの要素で仏様は世界を作っていて、天地創造をしている。仏様はこの大宇宙、この広大な多次元空間も創出している存在である。

4) 人類の図表は進化と調和で集約される。人類の歴史を見れば、進歩と調和、進化と調和という二大目標を中心に時が流れて来た。

5) 九次元世界は救世主の世界である。救世主は釈迦、イエス・キリスト、モーセである。九次元世界の中で一番中心的な存在は釈迦として導いて来た籍のある生命体である。釈迦の意識は巨大な生命体として九次元世界にある。釈迦の意識の本体を九次元では「エル・カンタレ意識」と言う。大きな法意識、人類を治める法の意識として釈迦の意識がある。

6) 釈迦は陣頭指揮をしながら新しい文明や新しい文化、新しい時代の構築を与えられた仕事として活動している。イエスは今、天上界の指揮命令系統を整理している。孔子は現在人類の進化計画、宇宙の中での人類や地球のあるべき姿、そのような大きい地球計画を立てている。モーセは 1 億年以上の歴史を持つ地獄をどのようにして解消させるかに対して責任を持って担当している。

6) 大川隆法自身が「絶対的真理(真如)の体現者である」と言った。彼はまた

「この本の初版本を世の中に出して以来、幸福の科学は奇蹟の大躍進をした。」と主張して、「この本の内容が九次元世界の根源に位置するという以外は言えない教えである。」と言った。

(5) モンロー研究所の霊界論

モンロー研究所は 1971年にロバート・モンローとその志願者たちによって設立された非営利団体である。人間意識について探求することを目的にしている。ロバート・モンローはラジオ放送のプロデューサーとして活躍した人である。1958年、42歳の時に最初の偶発的体外離脱体験をして、それが彼のその後の人生を大きく変化させるようになった。

モンローは医師や物理学者、技術者たちの協力を得ていてヘミシング(脳半球同調)法という音響技術を開発して、誰でもそれを聞けば、さまざまな変性意識状態を体験するようにした。ヘミシング法は右側の耳と左側の耳に若干異なる周波数の音を聞かせることによって、その周波数の差に相当する脳波を意図的に作り出すという方法である。

ヘミシング法は脳波を自由自在にコントロールすることによって、聞く人の意識状態をいろいろな状態にしてくれる。→熟睡、眠りを覚ます、リラックス / 体外離脱 / 死後世界の探索

モンローたちはさまざまな被験者にヘミシング音を聞かせれば、どのような体験をするか。身体的な反応はどうかを調査した。被験者は外界から隔離された小さな部屋の中にあるベッドで眠るようにしてヘッドホーンを通してヘミシングを聞く。

〈ヘミシング法の利点〉

- 1) 死後の世界を体験することができる。
- 2) 客観的な証拠を集めることよりも、各自が直接体験することに重点を置いている。
- 3) 座禅や冥想のように長期的な遂行や特殊な訓練をする必要がない。
- 4) モンロー研究所はすべての宗教と無関係である。
- 5) ドラッグなどの薬物のような後遺症が全然ない。
- 6) 死後の世界を探索すること以外にも、さまざまな実用的な目的に使うことができる。
 - ①手術を受ける患者が使用することによって、手術後の経過を促進する。
 - ②手術前の恐怖心を鎮めるなど医学上のさまざまな効果がある。
 - ③集中力を高める教育上の効果がある。
 - ④各種の訓練での効果などもある。

人間は肉体の死後にも継続して生きる。

死後に靈魂はどこに行くか? - > 私たちの心が決定する。

モンローは創造主の存在を認める。

私たちの意識レベルのずっと高い場所の上に、無条件的な愛の源泉として創造主が存在すると言う。ここへの回帰が全人類の目的だと言う。創造主がどのようにして存在するようになったのかについてはモンローも分からない。そこまでの予知を得る段階には到達していない。

私たちの創造主は、①私たちが人間として生きている一人の私たちの理解を超越している。②私たちもその一部として参与している進行中のプロセスの設計者である。③私たちの理解が及ばないようなことにおいても目的を持っている。④上のプロセスにおいて、必要に従って調節、微調整をする。⑤万人万物に通用する単純な法則を定める。⑥崇拜も賛美も自分の存在を認めることも要求しない。⑦ [悪]や [過ち]を罰しない、⑧私たちの人生の行動に関して勧めたり、反対したりしない。

ロバート・モンローが体験を通して明確にしていることは、①死後の世界の構造、②人間の意識構造、③遠い過去からの意識の遍歴、④宇宙と意識の連関性、⑤輪廻からの卒業などであった。

7. 結語

霊界の实在と霊界に関するみ言葉、イ・サンホン先生の霊界メッセージ、そして既存の霊界論を検討した結果、次のような結論を得ることができた。

第一、神は人間の体のような有形実体世界と心のような無形実体世界(霊界)を創造された。被造世界における人間の位置は、①被造世界の主管者であり、②被造世界の媒介体かつ和動の中心体であり、③宇宙を総合した実体相である。

第二、み言葉によれば、霊界は神を中心としたアダム主義、同時に真の父母を中心としたヒエラルキー組織であり、神が暮す本郷の地であり、すべてのものが愛で充満し、愛で一杯になった調和の世界である。

霊界では、愛でどのくらい人類を愛し、神が愛を中心としてつくって下さった被造物に対する時、いかに神のように愛するか、それが測定基準であり、コンピューター以上である。

第三、統一思想は私たちに下さった根源的思想であり、霊界でも真のご父母様の思想よりもっと次元の高い思想はない。

イ・サンホン先生は、「霊界人は地上生活を土台にして自己の生の位置が決定される。」とし、「自分の専攻分野も重要だが、霊界の生も研究しなければならない。」と言われている。

霊界で統一原理セミナーに参加した四大聖人と宗教人、共産主義者、言論人、政治家たちは、①神が人類の父母であり、全人類は一つの兄弟姉妹である。②文鮮明先生は人類の救世主、メシア、再臨主、真の父母、平和の王であられる。③統一原理は人類救援のための平和のメッセージであり、成約時代の福音書である。④宇宙平和統一は真の愛を中心として超宗教、超国家、超人種の「為に生きる生活」を通して完成する、⑤霊界(永遠な世界)は実存するとする宣言文を宣布した。

第四、既存の霊界論は霊界について無知な人々に霊界の实在を証明するのに多大な貢献をした。しかし、「幸福の科学」の霊界論は、①仏様が人類の親で

ある。②仏様がこの大宇宙、この広大な多次元空間も創出している存在であり、天地創造をした。③救世主は釈迦、イエス・キリスト、モーセであるとし、大きな法意識、人類を治める法の意識として釈迦の意識がある。④釈迦は陣頭指揮をしながら、新しい文明、新しい文化、新しい時代の構築を主な仕事として活動している。⑤大川隆法自身が「絶対的真理(真如)の体現者である」とし、「この本の内容が九次元世界の根源に位置すること以外は言えない教えである。」とし、「幸福の科学」は霊界論を通して奇蹟の大躍進をした。」と主張した。⑥一番次元の高い世界は人間には分からない偉大な根本仏の世界だと言った。

神が人類の父母であり、天地を創造された。釈迦やモーセは救世主ではなく、救世主として来られた方がイエス様であったが、文鮮明先生にその使命を引き継がせた。文先生のみが人類の救世主、メシア、再臨主、真の父母、宇宙平和の王であられることを地上でも霊界でも公認している。

神の絶対的真理のみ言葉から見る時、「幸福の科学」の霊界論は民心を混乱に陥らせる危険な思想だと言うことができる。